

## 愛を正当化する理由はあるのか

源河亨(九州大学)

近年の英語圏における愛に関する哲学の争点の一つに、「愛を正当化する理由はあるのか」というものがあり、あると主張する「理由説」と、ないと主張する「無理由説」が対立している。本発表の目的は、私たちの普段の愛の実践にかなうような正当化理由は存在しないと主張し、無理由説を支持することである。

争点を理解するためにまず重要なのは、説明理由(explanatory reason)と正当化理由(justifying reason)の区別である。説明理由は、問題となる物事の原因として指摘されるものである。たとえば、食べ物を窃盗した人が捕まり、なぜ窃盗したのか尋ねられたとき「お腹が空いていたから」という理由を挙げるかもしれない。この理由は窃盗という行為が起きた原因を説明するものではあるが、正当化するものにはならない。正当化理由は、心的状態や行為を支持する／合理化するものでなければならない。たとえば、誰かが他人から悪口を言われて怒った場合、「悪口を言われた」ということは怒りを正当化する理由となる。他方で、そうした理由なく怒った場合(たとえば、ちょっと声をかけられただけで怒ったら)、その怒りは不当なもののみなされるだろう。

愛の場合、そこに説明理由があることは問題になっていない。頻繁に会っていたり、職場が一緒だったり、気が合ったり、何かしら愛が生まれる原因は存在している。問題となるのは正当化理由があるのかどうかだ。愛は、その理由によって正当化されたりされなかったりするものであるのか。理由説はそうだと主張する。他方で無理由説は、愛は正当／不当と判定されない、正当化とは無縁なもの、無合理(arational)なものだと主張する。

理由説は私たちの普段の実践から動機づけられる(Kolodny 2003)。私たちは頻繁に他人の愛がふさわしいかどうかを判定している。たとえば、虐待されているにもかかわらず配偶者を愛していると言う人がいたら、その愛は不適切で正当化されていないように思えるだろう。同様に、犯罪者だからその人を愛しているというのも不適切に思える。こうした例から、愛は、不当だと判定されるもの、正当化理由を問える状態であることが示唆される。

このように正当化されない愛はわかりやすいが、では、正当化される愛にはどんな理由があるのか。すぐ思い浮かぶのは、相手が「誠実である」などの特徴をもつことかもしれない。「自分の恋人は誠実だから愛している」という話を聞いたら、私たちはその理由に納得するだろう。

しかし、こうした考えはすぐさま、乗り換え問題(trading up problem)に突き当たる。恋人を「誠実だから」愛しているのだとすれば、恋人よりも誠実な人がいたら、そちらへの愛が正当化されてしまうことになる。誠実さの点で優れた方を愛するのがよりふさわしいと言ってしまうのだ(同じことは「容姿が良い」など他の特徴でも言える)。だが、愛はこうした乗り換えは正当化されないように思える。そうであるなら、「誠実である」などの特徴は、愛を正当化するものにならないだろう。

乗り換え問題に対処する一つの方針として、相手の特徴ではなく相手との関係に注目するものがある(Hurka 2011, Kolodny 2003, ハルワニ 2023)。現在の恋人とのあいだには二人で築いてきた歴史があり、それは新しく出会った人にはない。そうした関係が愛を正当化する理由であり、したがって乗り換えは正当化されないということだ。

別の方針として、特徴を再定義する考えもある。乗り換え問題が生じてしまうのは、「誠実である」などの特徴が一般的なものであり、多くの人がもちうるものだからだ。しかし、他の人と共有されない特徴、個々人に特有の特徴が正当化理由になるなら、乗り換え問題を防ぐことができるだろう。こうした考えのもと、「その人に独特の考え方、ものの見方」などが正当化理由になると主張されることがある(Jollimore 2011; Naar 2022)。

以上が論争状況のサーベイになるが(より詳しくは、大畑[2021]を参照)、以下では修正版の理由説の問題を指摘し、また、無理由説を擁護する議論を提示したい。

検討したいのは、理由説の動機づけである。それは、私たちは普段、他人の愛のふさわしさを判定しているということだった。普段の実践として本発表が注目したいのは、Pismenny (2021)が指摘しているように、愛の正当化が問題となる場面は、他人から反対されたときではないかということだ。「その人を愛するのはおかしい、なぜ愛しているのか」と反対されたとき、正当化理由を挙げる必要に迫られる。こうした実践を踏まえると、理由説が実践から動機づけられるというのであれば、理由説には、反対者を納得させられる理由を挙げるのが期待されるのではないだろうか。だが、修正版の理由説が挙げていた歴史的関係も個々人に特有な特徴も、その期待に応えられない。「長く付き合っているから」「その人に独特のものがあるから」と言っても、反対者は納得しないだろう。納得させるには、「誠実である」といった一般的に好ましい特徴を挙げなければならないのではないだろうか。しかし、そうした理由は乗り換え問題を回避できるものではない。したがって本発表は、私たちの日常的な愛の実践に適合し、かつ、乗り換え問題を回避できる正当化理由は存在しないと主張する。

とはいえ、乗り換えに抵抗があることも、私たちの愛の実践に含まれているだろう。愛の正当化理由を否定するとしても、その抵抗は説明しなければならない。そのため本発表は、乗り換えへの抵抗は愛の生物学的側面と社会的側面で説明できると主張する。生物学的側面は繁殖や子育てのパートナーを見つけるために進化的に備わった部分であり(フィッシャー 2007)、社会的側面は結婚という(もともとは)経済的共同体を維持するための社会制度の影響により備わった部分である(谷本 2008)。どちらの側面も安定したパートナー関係の構築を促すような因果的効力をもち、そのため私たちはパートナーを変えることが不適切に思えるのである。

Hurka, T. (2011) *The Best Things in Life*, Oxford University Press.

Jollimore, T. (2011) *Love's Vision*, Princeton University Press.

Kolodny, N. (2003) "Love as Valuing a Relationship", *Philosophical Review* 112: 135-189.

Naar, H. (2022) *The Rationality of Love*, Oxford University Press.

Pismenny, A. (2021) "The Amoralism of Romantic Love", In R. Fedock, M. Kühler & T. R. Rosenhagen (eds.), *Love, Justice, and Autonomy: Philosophical Perspectives*, Routledge, 23-42.

大畑浩志(2021)「なぜ君でなくてはいけないのか:愛の対象の代替可能性について」、『Contemporary and Applied Philosophy』13: 107-23.

谷本奈穂(2008)『恋愛の社会学』, 青弓社.

ハルワニ, ラジャ(2024)『愛・セックス・結婚の哲学』, 江口聡・岡本慎平ほか訳, 名古屋大学出版会.

フィッシャー, ヘレン(2007)『人はなぜ恋に落ちるのか?:恋と愛情と性欲の脳科学』, 大野晶子訳, ヴィレッジブックス.